

# NEWS



国際交流イベントの様子

## 特集 反うわさ戦略から考える地域の共生 ～外国人住民を巡る噂とどう向き合うか～ …P1～2

目次

- 地域に開かれたモスクを訪ねて ～八幡モスクに学ぶ「共生」の実践～(報告)… P2
- 通訳者との連携とAIツールの活用(第2回外国人生活相談員意見交換会報告)・地域における日本語支援(研修会報告)… P3
- JICA京都デスクの取り組み・相談窓口Q&A… P4

特集

# 「反うわさ戦略」から 考える地域の共生



外国人住民をめぐる  
“うわさ”とどう向き合うか

## 研修会報告 (令和8年1月26日)

昨年の参議院選挙では、外国人の受け入れや政策が大きな争点の一つとなりました。人々の関心がこのテーマに集まったことは大きな一歩ですが、その一方で、SNS等を中心に根拠のないデマや偏見に基づく「うわさ」が急速に拡散されたことも事実です。こうした状況を受け、当センターでは、都留文科大学の上野貴彦先生をお招きし、「反うわさ戦略」をテーマにした講座を開催しました。

## 事実だけでは届かない、心理的な壁

今回この戦略に着目した最大の理由は、その「実践性」にあります。私たちは往々にして、デマに対して「正しい事実」を提示すれば解決すると考えがちです。しかし、実際には事実で否定しようとするのが、かえって相手の不信感を強めたり、噂をさらに広めてしまったりする「ブーメラン効果」を招くことがあります。

うわさの多くは、全くの嘘というよりも「事実の一部」が混ざり合い、人々の「未知のものに対する不安」と結びついて広がっていきます。反うわさ戦略は、こうした心理的なプロセスを丁寧に捉え、人々の不安に寄り添いながらコミュニケーションを重ねていく点に特徴があります。

## 「うわさ」を入り口にする有効性

これまで当センターでも「多文化共生」をテーマに様々な取り組みを行ってきましたが、どこか他人事として捉えられがちでした。しかし「うわさ」をキーワードにすると、住民にとって身近で、自分たちの生活と地続きの問題として受け止められやすくなります。

モデルとなったスペイン・バルセロナ市では、15年近くにわたり、予算化された長期戦略として取り組みが続けられています。一過性のイベントではなく、地域社会に根付かせるための継続的な取り組みが重要です。



「反うわさ戦略」から考える地域の共生研修会の様子

## ● 次のアクションへ .....

当日のワークショップでは、「外国人が治安を悪化させている」「ゴミの分別を守らない」といった具体的な「うわさ」を取り上げ、その言葉を口にしていない人は、どのような気持ち（不安、怒り、戸惑いなど）で話しているのかを想像するワークを行いました。うわさの正誤を判断するのではなく、その背後にある感情に目を向けることで、対話の可能性が見えてくることを参加者と共有する時間となりました。

参加者アンケートでは、「自分もワークのファシリテーターになって、地域で活動したい」という前向きな意見が複数寄せられました。知識を得る段階から、自ら動く「実践者」への意欲が見られたことは、講座として大きな手応えとなりました。

「うわさ」を放置せず、かといって対立もせず、対話の種に変えていく。このような地道な積み重ねが、これからの共生社会の土台づくりにつながるのではないかと感じています。今後も、地域で活躍する担い手の育成を含め、継続的な取り組みを進めてまいります



### 参考資料

● 自治体国際化協会(CLAIR)『反うわさ戦略のつくりかた』

[https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/efforts/docs/d6e5742552b64c640c8cb8719377f5fb\\_1.pdf](https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/efforts/docs/d6e5742552b64c640c8cb8719377f5fb_1.pdf)

## 地域に開かれたモスクを訪ねて

— 八幡モスクに学ぶ「共生」の実践 — (令和8年2月6日)

八幡市にあるイスラミックリサーチセンタージャパン(八幡モスク)を訪問し、代表のミルザ・ラムザンさんと行政書士の久保田征鑑さんからお話を伺いました。

八幡モスクは、地域に根ざした礼拝の場として設立され、イスラムの教えの根底にある「平和」を大切に、困っている人を助けるという精神を実践する場となっています。

モスクの設立・運営においては、行政書士が中心となりモスクと行政、地域との間で、制度や手続きの支援を行うなど、双方が安心して関わられるよう支えてられました。警察による巡回や行政による適時の支援など、行政や警察との関係も築かれています。

以前は子どもの日本語教室を行うボランティア団体に場所を提供していたことがあり、その経験から現在はモスク内に日本語学校が設置されています。ここではイスラム教徒に限らず世界各国からの多様な留学生が学んでいます。日本語や日本文化を学び、日本社会で働く道を開くことは、外国人にとっては将来の選択肢を広げると同時に、日本社会にとっても人手不足という課題への一つの対応になり得るとの話がありました。

また、日本で暮らすイスラム教徒にとって土葬の問題が課題となっていることにも触れられ、日本の葬送・埋葬習慣との違いや地域住民の理解など、現実的な問題についても考えさせられました。

アンケートでは、「礼拝時の説教がアラビア語で行われていたが、全員がその内容を理解しているわけではないという話が印象的だった」との声があり、イスラム教徒の多様性への理解が深まった様子がうかがえました。また、「礼拝堂の雰囲気印象的だった」「モスクが居場所やセーフティネットとして機能していることが分かった」という感想も寄せられました。

今回の見学では、礼拝の場として始まったモスクが、日本語教育や地域との接点を広げながら役割を深めてきた歩みを知るとともに、異なる背景を持つ人たちがどう向き合い、共に暮らす地域をつくるかを考える機会となりました。



礼拝室見学の様子

## 第2回 外国人生活相談員 意見交換会 (報告)



### 通訳者との連携とAIツールの活用

ことばの壁を越える外国人対応の  
実践とネットワーク構築 (令和8年1月23日)

外国人住民の増加に伴い、外国人生活相談における言語ニーズが年々多様化しています。ランゲージワン株式会社のカブレホス・セサルさんを講師に迎え、相談現場における多言語対応をテーマに研修会と意見交換会を開催しました。行政、NPO、国際交流協会などさまざまな立場から参加がありました。

まず、電話通訳や対面通訳、AI翻訳、翻訳資料などの特徴(強みと限界)について学びました。例えば、医療や在留資格に関わる手続きなど慎重な対応が求められる場面では、人による通訳が重要な役割を果たします。一方で、窓口での定型的な案内や情報の概要を伝える場面ではAI翻訳が有効に機能することもあります。いずれも万能ではなく、状況や内容に応じて適切に選ぶ視点が重要であることを確認しました。

意見交換では、他団体の取り組み内容についてお話を伺いながら、場面に応じた通訳・翻訳方法を考えました。相談には一つの団体だけで解決できないケースも少なくなく、連携を円滑にするためには、普段から顔の見える関係づくりが重要であると改めて認識しました。

アンケートでは、「支援者兼通訳という立場のため、言語の移動だけで済ませることが難しい場面がある」「外国人住民の多い他地域の事例やノウハウを知ることができ、有意義だった」との感想が寄せられました。

今後も情報交換の場を設け、より円滑な相談体制の構築を目指していきたいと思います

#### ● 京都府外国人住民総合相談窓口 [支援者の方も、ご相談ください](#)

外国人住民の生活に関するご相談に、25言語(電話通訳)で対応。行政等支援に携わる方からのご相談もお受けしています。在留資格など専門的な内容は、必要に応じて専門家へおつなぎします。



## 地域における日本語支援

(研修会報告) 令和8年2月14日

### ～対話・協働・相互理解について考える～

地域で暮らす外国人住民が増えるなか、日本語学習支援は言葉の習得を支えるだけでなく、生活の安心や地域とのつながりを築く上でも重要な役割を担っています。

特定非営利活動法人 国際活動市民中心(CINGA)理事の萬浪絵理氏をお迎えし、地域日本語教育をめぐる近年の動向や支援者の役割について学ぶ研修会を開催しました。府内の地域日本語教室のネットワークである「京都にほんごRings」との共催で、各地域で日本語支援活動をしているボランティアの方々の参加がありました。

まず、地域社会で暮らす「生活者としての外国人」にとって安心・安全な暮らしや社会参加につながる日本語能力とはどのようなものかについて学びました。日本語教室では、支援者と学習者が対話を通して「自分」を伝え「相手」の声を聞くことが重要であると認識しました。

そして、グループワークで「相手」の声を聞くための学習活動を体験し、外国人学習者から発話を引き出すコミュニケーションの工夫の大切さを確認しました。

参加者からは「グループワークが楽しかった」「具体的なワークがとてもよかった」と、お互いに「対話」をしながらの学びへの満足感があつたようです。「今回の研修を今後のボランティアとしての活動に生かしたい」との声も多く寄せられました。今後もこのような研修を通して、日本語支援に関わる様々な立場の方々がつながり、情報交換ができる場を設けたいと思います。

地域における日本語支援研修会の様子



# JICA京都デスクの取り組み

JICA京都デスクは、京都市立紫野高校と連携し、高校1年生約280名を対象とした全5回の実践型学習「高校生地球市民ボランティア派遣プログラム」を支援しました。異なる文化や価値観をもつ人々と共に生きるとはどのようなことを体験的に理解することを目指す取り組みです。

異文化シミュレーション「バファバファ」を通じて、文化の違いに直面した際の戸惑いや気づきを体験し、JICA海外協力隊経験者の体験談発表を聞きました。さらに、架空の村「ウジュ村」を題材に住民へのヒアリングを行い、立場の異なる声から課題の背景を読み解いたうえで、住民と共に取り組む2年間のアクションプランを検討しました。

最終回の発表会では、校長先生や協力隊経験者から講評があり、現地の生活を一緒に体験し、対話を重ねながら現地の人々と共に活動を創り上げていくことの大切さを改めて確認しました。

担当教員の小林先生からは、次のようなコメントをいただきました。

「本プログラムは国際協力を『遠い出来事』ではなく『自分とつながる課題』として捉え直す学びになりました。生徒は村民へのヒアリングや資料分析を通して、感情的な理解から、課題の背景や関係性を考える視点へと深めていきました。また、当事者の声に基づき、協働しながら改善する姿勢は、学校生活や地域にも通じる力だと実感しています。JICAとの連携により学びのリアリティが高まり、今後の探究への確かな起点となりました。」



JICA国際協力出前講座は小・中・高等学校、大学、市民を対象とした講演・イベントで実施しています。講師派遣をご希望の方は、JICA関西のホームページからお申込みください。

## 相談窓口 Q & A

**Q** 外国人の方から、家族の就労に関する相談を受けました。ビザ(在留資格)の相談会で、ボランティアが代理で相談することはできますか？

**A** 専門家相談は、原則としてご本人が受ける必要があります。これは、代理の方を通して不正確な情報が伝わり、本人や支援者がトラブルに巻き込まれるのを防ぐためです。また、在留資格によって働ける時間や職種が決まっているため、正確な確認が必要です。通訳者や支援者の同席は可能です。

外国人支援についてお困りのことなど  
お気軽にご相談ください

京都府多言語生活相談

TEL: 075-681-4800

詳細はこちら



## ～賛助会員を募集しています～

当センターが実施する様々な地域国際化事業や団体運営の財源に充てるため、趣旨にご賛同いただける皆さまを対象に賛助会員を募集しています。

【会費】 個人会員／年額 1口 3,000円  
団体会員／年額 1口 10,000円

【特典】 ・センター情報誌など定期刊行物の送付  
・当センター主催の各種講座等への優先参加  
・当センター内の有料スペースを会員料金で利用可能  
・他団体との提携による会員特典

入会方法など詳しいことはHPをご覧ください。

[www.kpic.or.jp/about/sanjo.html](http://www.kpic.or.jp/about/sanjo.html)



## パスポート写真撮影のご案内

パスポートの規格に合った写真を責任を持って撮影します。

【場所】 京都駅ビル8階

(京都府旅券事務所の隣に併設)

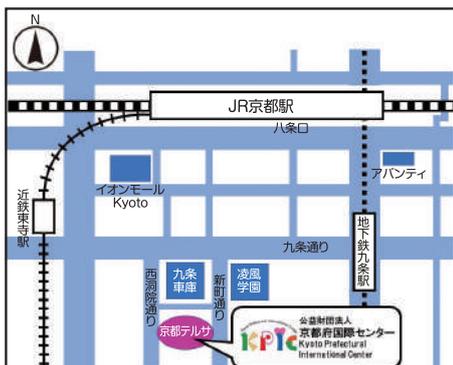
【営業時間】 月曜日～金曜日 9:00～16:30

【撮影料金(税込)】

2枚 1,800円 / 4枚 2,300円 / 6枚 2,800円

【お問い合わせ】

TEL 075-342-5002



## 公益財団法人京都府国際センター

〒601-8047 京都市南区東九条下殿田町70 京都テルサ東館3階

Tel : 075-681-2500

Fax : 075-681-2508 E-mail: main@kpic.or.jp

[www.kpic.or.jp](http://www.kpic.or.jp)

facebook [www.facebook.com/kpic.kyoto](https://www.facebook.com/kpic.kyoto)

開館時間 / 午前10時～午後6時

休館日 / 火曜日、祝日、年末年始(12/29～1/3)

公益財団法人京都府国際センター NEWS Spring 2026 春号107号

編集・発行 / 公益財団法人 京都府国際センター Kyoto Prefectural International Center

